

この8月14日に世界コンテストのインターディストリクトB部門で、日本を代表された東公成さん。入賞することはありませんでしたが、充分手ごたえをつかまれたと伺っております。下は、米国に立出する直前の2007年8月6日にジャパンタイムズ社刊行の英語学習紙、週刊STに掲載された東公成さんの取材記事です。新聞社のご厚意により、記事のテキストと写真をご提供頂きました。

## 目指すのは優勝よりも人生とスピーチの一致

この8月、スピーチとリーダーシップ力の育成を主眼に置く国際的なNPOである Toastmasters Club (TMC)が、スピーチの世界大会を開催する。その舞台に日本を代表して参加する東公成さんに、TMCとの出会いからスピーチ上達の秘けつまでを語っていただいた。



1980年代半ばに出版された世界的ベストセラー、“Letters of a Businessman to His Son” (邦訳『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』キングスレイ・ウォード著、新潮文庫)。

父親から息子への手紙という形式でビジネスの心得を説いたこの本の中に、public speaking (講演) について学ぶなら、

“Probably one of your best bets would be to join Toastmasters” (最良の方策の一つはトーストマスターズに参加することだろう) という記述がある。

Toastmasters とは「司会者」という意味で、前述の本で紹介された Toastmasters とは、1924年にアメリカで設立された Toastmasters Club (TMC) のこと。TMC は現在約90カ国に1万以上のクラブを持ち、会員数は20万人を超える(日本のクラブ数は77、会員数は1,844人) という非営利の国際的団体である。

個々のクラブは会員による自主的な運営に任されている。TMCには指導する先生はおらず、定評ある世界共通のマニュアルに基づいたスピーチの実践と、ネイティブなどのmentor (助言者) および会員同士のフィードバックによって、スピーチ力とリーダーシップの育成を目指すのがクラブの趣旨である。

### ■アカデミー賞の授賞式のように

TMCでは毎年、スピーチの世界大会を行っており、今年は8月中旬に米国アリゾナ州フェニックスで開催される。この舞台に日本予選を勝ち抜いて、13人の本大会予選に参加する出場者の一人となったのが、神奈川県の大和バイリンガルTMCに所属する東公成さんだ。



東さんがTMCと出会ったのは、今から7年前のこと。当時勤めていた外資系のコンピューターメーカーでは、インドやマレーシアの取引先と行なう毎週のミーティン

グで司会を務めなければならなかったが、会議の英語には自信がなかった。インド人のスタッフに司会を代わってもらうこともあり、それが悔しくて英語で司会のできるスキルを身に付けたいと思い始めた。

英会話学校などで自分の希望する講座を探したが見つからず、そんなときまたまネットで見つけたのが TMC だった。「ここでならパブリックスピーキングを学ぶことができるのではないか」と、2000年8月に自宅に近い厚木座間TMCを見学した。「驚いたのは、普通のおじちゃんやおばちゃんが、アカデミー賞の授賞式で司会をするかのように振る舞っていて、その場を盛り上げていたことです」東さんがその場で入会を決意したのは言うまでもない。

### ■メンバーから貴重なアドバイス

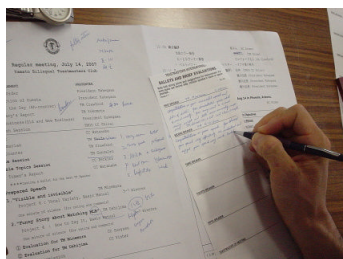
入会後は、TMCでの月2回の活動が始まった。スピーチのネタ帳を作り、テーマごとに話のディテールを書き込んでいく。ネタになるのは、自分の人生を振り返ってよかったこと、学んだことだ。さらにスピーチのテクニックが記された TMC のマニュアルに基づいて、スピーチのテクニックを習得していく。クラブの運営方法についても詳述されたこのマニュアルは全部で60冊にもなるが、7年というキャリアのある東さんでも、こなしたのはこれまでで7冊ほど。最初に取り組む Basic Manual でさえ、ネイティブのアメリカ人が繰り返し復習する。

「スピーチで大切なのは、メッセージをいかに効率的かつ最短距離で伝えるか、そして自分の言葉からあいまいさをなくすこと。TMC ではこれができているかどうかをクラブのメンバーからフィードバックしてもらえることに、大きなメリットがあるのです」

メンバーからのフィードバックには、心を開いて謙虚な気持ちで受け止めることが大切だと、東さんは言う。自分はそういうつもりで話したのではないのに、なぜそう聞こえたのか、どこを改善すればよいのかを自問自答する。また、ほかのメンバーのスピーチに対して自分がフィードバックを行なうときには、このスピーチをよりよくするにはどうすべきかを考えるわけで、それ自体が自分にとっての訓練にもなる。

もちろん、発音や表現面でのアドバイスにも傾聴すべきものは多い。

「例えば、あるつらい経験をテーマとしたスピーチの中で、それが終わったときの気持ちを、飛行機が機体を斜めにしたときに窓から射して来る太陽の光になぞらえて bright sunshine と表現したのです。すると『そこは glorious sunshine の方がいい』という絶妙なアドバイスをもらったことがありました」一方、こうした訓練を通じて、当然のことながら仕事で使う英語にも磨きがかかっていく。メールをコンパクトに書けるようになったり、稟議書が100%近く通るほどの表現力も身に付けた。



「例会ではprepared speechのほかに、最近仕入れたジョークを紹介する joke session などもあり、さまざまな形で英語で話す機会が与えられる」 「各メンバーには評価シートが配られ、スピーチに対するフィードバックとその日のベストスピーカーを選ぶ投票が行なわれる」

## ■目指すのは人生とスピーチの一致

8月14日の予選、そして18日の決勝を前にした数ヵ月の間、東さんは所属するクラブだけでなく、各地のクラブに参加して、できるだけ多くスピーチの機会を作り、多くの人からアドバイスをもらい、7分ほどの時間に思いを込めたスピーチに磨きをかける。

「スピーチを行なうときは、聴衆の皆さんから力をもらわないと、エネルギー切れを起こしてしまいます。だから聴衆を笑わせたり(スピーチ開始から90秒以内に笑いを取るのがコツなのだそう)、うならせたりしてコネクトさせる工夫が大切なのです」

お話を伺えば伺うほど、スピーチが一種の performing art (総合芸術)に思えてくる。それもそのはず、東さんにとっては、世界大会で優勝することよりも、スピーカーとして成長すること、そして自分の人生とスピーチをピタリと一致させることが究極の目標なのである。 (週刊ST編集長 玉川帰一郎)

出典:「週刊ST(ジャパンタイムズ刊) 2007年8月10日号」  
<http://www.japantimes.co.jp/shukan-st/>

---

### 本記事に関連するサイト

日本のトーストマスターズをサポートするDistrict76のWebサイト  
<http://www.district76.org/>

大和バイリンガルクラブのWebサイト  
<http://www.geocities.jp/yamatotm711/>

東さんの「Toastmasters徒然草」ブログ  
[http://tmaz.cocolog-nifty.com/tm\\_diary/](http://tmaz.cocolog-nifty.com/tm_diary/)

東さんの上記のサイトには、世界コンテストでの情報が非常に詳しく紹介されています。

---